

マリガヤインターン徒然日記

佐々木 裕介

12月からマリガヤハウスのインターンとしてお世話になっている佐々木です。マニラでは、翻訳作業に加えて第二回国籍申請、家庭訪問など、やらせてもらえる業務の内容も増えてきました。派遣してくれたJFCネットワークには再び感謝感謝です。カルメンさんと一緒にクライアントの家庭訪問に行った時に感じた事など、マニラでの2ヶ月半の印象を書きたいと思います。

10件程の家庭訪問を通して感じた事は、貧富の差が大きいと言われるフィリピンの中で、元エンターテイナーの方々も本当に多様な生活を築いているということです。父親からのギフトと送金で豪邸に暮らしながら、JFCは私立大学に在籍しているというアキノ(仮名)家。JFCのマイコちゃんは宇多田ひかるを上手に歌ってくれました。家族9人が一部屋に住み、暮らしは自転車操業というディアス(仮名)家。お母さんは毎日働いていても日給は500円。JFCが学校に履いていく靴すら買えません。JFCの父親は社長さんらしいですけどね。何とかならないものなのか。ただこの生活もフィリピンの現実、と話してくれたお母さんは綺麗で親切な方でした。自力で日本行きへの扉を開けようと努力しているJFCのミコさん。インターネット上で知り合った他人を通して父親を探し出し、DNA鑑定まで持ち込んだ彼。正に奇跡か、神のご加護か。日本行きを願って日本語を独学で勉強しています。

マニラで現地の子ども、母親達を見るにつれ、法的支援から得られる経済的な利益という側面を強く意識させられています。特に国籍取得プロジェクトに関わる時に強く感じるのですが、フィリピンで暮らす人にとって日本国籍とは大金を出してでも買いたい権利であるという現実。日本で生まれ育ったJFCのケースとは違い、フィリピンで生まれ育ったJFCがフィリピン国籍を捨ててまで日本国籍を取得したがるのは一般の日本人にとっては不思議な感覚なのではないでしょうか。国籍取得が子どものアイデンティティーに関わる問題だという言葉は耳にしますが、言葉も文化も100%フィリピン人である彼らが日本国籍を取得したがるのは経済格差に起因する動機に他なりません。

それにも関わらずJFCネットワークでは、こちらの主観的視点として経済的フィルターを通した支援という物ができない。片や父親の残していった大金のおかげで働かずとも安泰な生活を送れている家庭があり、更なる遺産相続のため(?)認知請求を支援することもあれば、本当に毎日食うものに困っている家庭だけれども法的措置に出るだけの十分な証拠がありませんとなれば、何もできることはありませんとなってしまふ。

そうすると、法律のフィルターをかけることによって守ろうとしている人権って何なんだろうと考えさせられざるを得ない。子どもの扶養される権利と父親の義務を考えれば、日本人にとっては当たり前の権利関係を実現しているに過ぎないかもしれない。ただ、子どもができる男は逃げるといふケースが多いフィリピンでは、1人の男が20人、25人と子どもを作っても誰も驚かない。JFCに限らず、父親に放棄された子どもなどいくらでもいるのが現実という中で、まともな法的権利を行使できるというのは、“those who were lucky enough to have a Japanese father”という印象をどうしても拭えない。日比間での法治国家としてのギャップに起因した特異さなのだと思う。日本の法律がここフィリピンで行使されているという現象も、法治格差に起因した日本からの“Payback”だと考えられなくもないとしたら、長い視点で見た時に法治のグローバリゼーションの一例として、世の中の発展に寄与できるものではないかと思えてきた最近です。